

「障害がない」と語った理由

－2名の知的障害のある人の語るライフストーリー－

○ 青山学院女子短期大学 氏名 杉田穂子 (2873)

障害の自己認識、ライフストーリー、知的障害

1. 研究目的

知的障害のある人の中には「自分には障害がない」という人がいる。その理由として、明確な定義の不在、不可視性を伴った障害特性、周囲の説明不足、知的障害という抽象的な概念を認識する能力そのものに障害があることなど、さまざまな要因が考えられるだろう。その理由を知的障害のある人の語るライフストーリーから探っていく。

2. 研究の視点および方法

筆者は知的障害のある人の障害の認識とライフストーリーには関連性があると考え、知的障害のある人(福祉サービス利用者)にライフストーリーと障害の認識についてインタビューを行っている。今回は「障害がない」と語った理由を知り得たと考えられるAさん(60代女性)、Bさん(30代女性)について発表したい。インタビューは個別で実施した。

3. 倫理的配慮

インタビューは研究目的であることを、事前に施設を通して本人に了解を得、名前、地域、施設名を公表しないことを約束し実施した。本発表に際して、再度施設長に了解を得た。

4. 研究結果 [なお、()は筆者、「」はAさん、Bさんの語りである]

1回目のインタビュー：初めて会ったため、最初はお互いに緊張していたが、話していくうちに笑顔がみられた。インタビュー後の感想で、Aさんは「なんか胸の中につかえていたものがす～っとした」Bさんは(しんどくなってませんか?)「いや、大丈夫」と語った。2人とも普通高校を卒業後、Aさんは家の農業を手伝い、Bさんはハローワークで仕事を探すが見つからなかった。その後、知人から〇〇の家[福祉サービス]を紹介され見学を経て、利用を始めたというライフストーリーが語られた。障害の認識についてAさんは「障害なんかじゃない。療育手帳をとりにいったけど」、Bさんは(障害をもってる人^注だと自分のこと、思いますか?)「いや、思っていないです」と語った。

2回目のインタビューまで：筆者は「障害がない」と語る人の理由を知りたいと思いながら、どのように話を深めていけるのか、悩んでいた。「なぜないと思うのですか」と問うのは、不適切で話が深まらないと予測された。そこでAさんの「障害なんかじゃない。療育手帳をとりにいったけど」という言葉をヒントに療育手帳の取得をどのように捉えているのか尋ねてみることにした。しかし内心は、「ちえ遅れとはどのようなことなのか正確に知らない場合には…障害の否定という形で現れる」(Johansson ら=1994, 45-7)や、知的障害のある兄をもつ筆者の友人から「兄は自分を障害者と思っておらず、作業所を会社と思っている」という話や、これまでの別のインタビュー例から、Aさん、Bさんも、知的障害という概念をきちんと説明される機会がなく、障害を認識していないと予測していた。

2回目のインタビュー（2年半後）：二人とも筆者のことを覚えていたため、1回目よりリラックスした形で始めることができた。Aさんは2年半前に入ったグループホームが楽しく、日常は原家族とは離れ、却って関係がうまく流れていた。（今が一番幸せですか）「そうですね」と語った。Bさんは大きな変化はないが仕事もうまくいっている様子が語られた。再度障害の認識を問うと、Aさんは（障害をもっている^注というふうに思われますか）「療育手帳で丸Bとかつけられ、ついとるからね。やっぱりまあ」（だからあるのかなあと思いませんか）[16秒間沈黙]（…丸Bってというのは何？）「知的障害者、知的障害者のほうだと思うんですけど」（…それはだれかに説明されたんですか）「市役所の人に来てから説明してくれた」（Aさんはそれを聞いてどうですか…どんな気持ちだったかしら）[18秒間沈黙]「なんか嫌だなと思った」（嫌だなと思った。あるいはちょっと違うよとか）「そ」/中略/（嫌な思いいっぱいされてきたんですねえ）「そ。それずっと我慢してたから。まあ。話す相手もいなかったからね」と語った。二十数年前のできごとをよく覚えていた。Bさんは、（2年前お話伺った時/中略/その時はないと思うとおっしゃったんですが、今はどう思われますか）「自分ではなんか障害あるような気がするんですけど」（今はあると思う。あつ本当ですか。えっと2年前はどうでしたか…）「や、ちょっとわかんない」（なんで障害があると思ってますか）「自分でそうかなと思って…療育手帳もつたら、障害もつことになるんじゃないかって」「ああゆう人たちと仲間にはいるんかなと思って」（それはやっぱり嫌なことでしたか）「はい」と手帳と障害の関係を認識していた。家族は、Aさん、Bさんを大切に育ててこられ、日常会話はたくさん交わされていた。が、だからこそ家族とは「障害」について話したこともなく、このような気持ちを今まで話したことがなかったと語られた。

5. 考察

AさんもBさんも1回目のインタビューで「障害がない」と語ったのは、障害を認識していないからではなく、数十年も前に療育手帳を受け取る時、その意味を認識していたが、受け入れられない気持ちがあったため「障害がない」と語ったと思われる。その気持ちを周囲の誰にも話していないことが2回目のインタビューで明らかになった。以上のように知的障害のある人の中には、知的障害があると周囲から言われていると認識しながら、受け入れられないために「障害がない」と言う人がいると思われる。数十年前の誰にも話していない話を筆者に話したのは、今までそのことを話題にする人が周囲にいなかったこと、インタビューが2回目ですリラックスしていたこと、利用している福祉サービスが自分の生活を豊かにしていることを実感するにつれ、次第に障害の有無はこだわらなくてもよいことになっていたことなどが考えられる。

注：「もっている人」より「ある人」という表現が適切だが、このように尋ねてしまった。

文献：Johansson E. , Wrenne H. (1980) *Forstands Handikapp och Sex*, LTs (=1994, 大井清吉, 柴田洋弥監修, 尾添和子訳『障害の自己認識と性』大揚社).

本研究は平成27年度科学研究費助成事業基盤研究(c) (課題番号 26380825)「知的障害のある人の語るライフストーリーと障害の自己認識の関連性に関する研究」によるものである。